菅笠づくり

天才を超える工夫

名人　中西（なかにし）ミツエ・新潟県柏崎市（かしわざきし）

聞き手　橋場（はしば）そよか・群馬県　ぐんま国際アカデミー高等部２年

■自己紹介

　私は中西ミツエです。昭和９年４月10日生まれです。今85歳です。家族は今ね、娘と、それから孫と、３人で住んでます。孫が２人いるんです。１人はお嫁に行って。出身は、この集落の下にある漆島というところ。ここは荻ノ島でしょう。それでねえ、下の集落が、漆島っていうんです。荻ノ島へは23歳のときに嫁に来ました。

　私は父親がね、亡くなっていなかったんです。それでお母さんとおじいさんに育てられたん。兄弟はね４人います。でもみんな嫁さんに行ったり、旅に出たりした。

　今私はね畑専門です。小豆でしょ、豆でしょ、それから、大根、キャベツ、白菜、なす、きゅうり、ごぼう、かぼちゃ、ほとんどだね、里芋からね、いっぱいあります。畑は１人でやってます。菅笠作るのは冬の仕事にしてるの。冬はね、畑仕事がないから。

■荻ノ島

　荻ノ島っていう集落はね、あまりセコセコしない。人間が穏やかっていうか。悪く言えば競争心がないっていうかね。昔の人は「山師根性（やましこつじょ）」ねえって言うんだけど。人掻き分けてでも自分が一等賞になってみようとかいう人がいないような気がする。いろんなものに挑戦してみよう、こうやって一稼ぎしてみようか

中西さんの家の近くにある地蔵。かぶっている帽子は中西さんが編んだもの

とかってそういう気持ちのことを山師根性っていうんですよ。そういうね大胆な根性がないと思います、この集落は。だから、われいに（割と）ね、輪が整ってる。自分さえ良ければ人はどうでもいいやっていう人があんまりいない。私は平成4年から17年まで仕丁をしましたね。仕丁ってことは、集落のお手伝いってこと。だからほら、なんか会合のあるときに支度をしたり、手紙を全部みんなに配ったりしましたね。

■戦時下の幼少期

私ら小せえときにはねえ、そうだねぇ、ともかく戦争の時代で、終わっちゃったからねぇ。

昭和12年が支那事変でしょう？　そしてね、私ら小学校1年生のときに、昭和16年の年に、大東亜戦争が12月の8日に始まったでしょ。それから5年生になって終戦。そこまで、ずうっと戦争の最中を私ら学校にいたわけ。だからね、もう4年生ごろからね、村の畑を耕してもらって、そこに作物植えたり、食べるものをとにかく、勉強よりも食べ物とるのが仕事だったの。それで今度はそうだね4年生のときだから、19年の年に東京から、疎開が来てね。東京の親戚の人が、もう東京に空襲でいられなくて、来て。それで疎開に3人ぐれぇ来たかな、私のとこにもね。

ともかくね、子供時代はそういう時代でしたね。

それで今度ね、私らが中学へ入った年に、私らから新制中学1年生って名前になったの。そして、そのときに義務教育になったの。それで義務教育になったから大勢になったでしょ？　そして教室がなくなって、学校を作るってことになって。それで私らがね中学2年生にともかくね、やっとできたと思うんだけど。中学1年生のときにはともかくね、背負いかごという小さいかご作ってもらってね、川原へ行ってね、材料を集めるわけ。全部みんな生徒が川原で集めたん。高尾の集落の上の学校が空いてたのね。それでね、1週間ずつその学校へお世話になった。教室を借りてね勉強してた。それから、教科書はわら半紙。半紙で一番質の悪い、わら半紙っていうんですよ。先生がみんな刷って、それをホチキスで止めてね、それを教科書の代わりに使ってた。

それで学校から帰ってくるとね、山へ牛の草刈り行くんです。牛に食べさせる草を、刈りへ行ってきて、それしてやっと、私が遊べる時間がもらえるん。あんまりよく遊んだ覚えはないけど、でもお手玉とかね。お手玉したり、山歩きとかね、山歩きをするんですよ。本当に山育ちだからね。

中学3年上がると愛知県知多郡の紡績に行ったの。大日本紡績。あのね、綿でもって糸とって、それでね、機織ったり糸とったりする、大きい工場です。女工さんが何千人もいた。そこへ2年ほどいたかな。ちょっと体悪くして帰ってきて。

帰ってきてから、東京に親戚のところにね。昔はね、女の人は、お嫁に行く前にお手伝いさんをしてみないと、花嫁修行に。そういったようなことがあってお手伝いにちょっと2年くらい行って、それで帰ってきました。荻ノ島に嫁いで来てからはずっと農業です。

■叶わなかった夢

子供のころ、夢があったんです。本当は、あったんです。中学のときから、看護婦になるのが夢だったんです。でも、うちの事情でできなかったの。おじいさんがね、昔よくヤブ医者ヤブ医者って言ったんだけどね。ちょっとね、医学の心得があったらしくて、それでみなさんにね、手を打ったのとか肘の関節が外れたのとか。昔はほら腫れ物があったんだよね、その膿を出してやったとか。私も手伝わされましたよ。きっとそれがきっかけだと思いますね。

■きっかけ

私は冬に菅笠を作ってる。

私が23にお嫁に来て、初子を産んだとき、26歳ごろにね、親戚のお母さんが笠編んでたんで、私も習おうかなって思って。そこで習ったんですよ。私が趣味で始めてね。それで、親戚の人にあげたり、いろいろしてたの。菅笠を仕事にして始めたのはね、平成10年ごろから。それでね、13年の年からね、ツバクロという小さな店をだいたい8人か6人くらいで始めたんですよ。それから、そこに笠を出すようになったの。いろんな作物もだけど菅笠もね売ったの。そのときにね、だいたい一夏にね30個ぐれえ売れるん。売れたんですよ。50個作ってもね、余ったのなかったですね。みんな出ましたね。だいたい今、愛菜館でも1年に20個くれえ売れるかな。

■菅笠に込められた知恵

菅笠はこの地域特有ってわけではないよね。新潟県あらゆるところにあるんじゃないですか。

菅笠は一年中使えるからね。だからね、釣りをする人とかね、絵を描く人とかね、「帽子よりも、笠の方が風通しがいいんだ」ってよく買いに来てくれますよ。笠は、雨絶対大丈夫。雨でも大丈夫だし、お天気にもいいしね。

新潟は雪国でしょ。雪国の人は雪降ろしに屋根に上がるときには必ず笠をかぶらせるの。ヘルメットは、つばが小さいでしょ。万が一、上から落ちた場合、笠はね、顔と雪が落ちてくる間に空気の間ができるのね。顔に対しての空気の場所が。そうすると命が助かる。だからね、必ず冬はね、「笠かぶって上がれ」って言われたもん。みんな意味があってね。昔の知恵って大したもんですね。そう思いますよ。昔の知恵袋って本当に偉いなと思いましたね。

昔は女の人はね、大きい笠をかぶってたの。それでね男の人はズッポ笠っていって、私が今編んでるのをかぶっていたのね。でも、大きいのはもう廃れましたね。骨組みがないから。うちには私の大きいのが1個あるけどね。あとは、子守笠といってね、昔は守っ子笠と呼んだけどね、こんなに大きい笠もあったんですよ。それで子供をおんぶしてても、子供の頭まで隠れるんですよ。

今作ってるのはズッポ笠1種類です。うちの地方ではズッポ笠っていうんですよね。きのこにもね、ズッポ茸ってのがあるんですよ。ズボっとしているから、ズッポ笠っていうんでしょうね。柿もよくね、長い柿があるでしょ、それをズッポ柿っていうんですよ。うちの方じゃ。だからきっとそういうのに見立ててズッポ笠っていうんだと思います。

菅笠は雨に遭わせなければね、3年から4年は持つね。雨に遭わせると、色がだんだんだんだん古しくなっちゃってね。私のはもう5年は使ってる

ズッポ笠。中西さんが作っているのはこの種類

以前は女の人がかぶっていた大きな笠。骨組みの作り手がいなくなってしまったため今は作っていない

の。悪くなると、みんな剥いでさ、骨組みの竹はおんなじ竹を使って、作り直した。使い捨てじゃなくて、最後の最後まで、直して使い、直してするのが私たちの時代だったから。

■少しの道具と手

作業は手です。道具は、ヒゴというものが1ついるんですよ。スゲを抑えるための、竹でもって作った、ヒゴ。それとね、針と糸とハサミ。あと、ヒゴを研ぐ鉈ね。そうそう切れ物ね。それがいる。それがあればもうできるんです。ノリとかは一切使わない。

針は布団針。布団針といってね、大きい針。長い針。この針で布団を閉じる。それで糸はね、水糸を使うの。昔はね、麻でやってたの。でも麻も、作られやしないからね。この水糸でやるの。ハサミでしょ、ハサミはもうともかく使うからね。ヒゴを作るのは、この鉈。刀の刃なの。おじいさんが、刀の刃でもってこれを作ったん。ヒゴ作るのにね、片刃だとね、竹が切れちゃってダメになっちゃう。刀がちょうど両刃じゃない。これが両刃だとね、引っ張っても平らに。それで、道具はないのよ、これでもう。

笠の骨組みっていうのはね、昔は竹でもって全部手作りで作ってたのね。村の人が骨組み作ってくれてたの。でも、やっぱり、石油が使われるようになって、早々とプラスチックでできたのができた。

菅笠の作業道具。左から、鉈、布団針、水糸、ハサミ、霧吹き。上にあるのは笠の骨組み。右にあるのはスゲ

た骨組みを買ってきて、それでやるんです。

私はね、そんなに汚ねえものじゃないから、子供がいないし、コタツの端っこの方で、やってるんだけどね。若い人がいっぱいいたり、子供がいたりすると危ないし、汚いから、違う部屋でやらなばならんだろうけども。私は今うちじゃあ人数少ないんで。

笠を編むのに使う布団針。通常の針よりも大きい。元は布団を縫うための針

■スゲの収穫

スゲを刈る時期もあってね、夏の土用を過ぎないとね、いい草になれないから、7月の土用すぎると刈るんです。だから7月の末から8月の初めあたりに、採らないと。早く採ると、これが干すとみんな縮んじゃうし、それから遅くなると固くなっちゃって。パリンパリンしちゃってね。やっぱ季節があるの。刈る時期がね。

刈ったのを干して、それで干したあと、あの選るっていうかね、全部拾い分けて、使えるのと使えねえの。細いとかさ、切れてたとか、そういうのは使えないから。

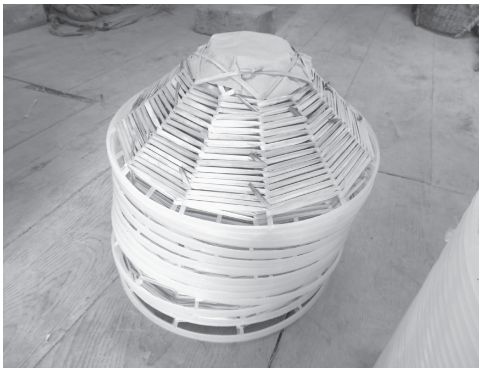
スゲは、要は山の草なんだけど、ただただ山の草にしておくといいスゲが生えない。だから、昔は自分で田んぼのいらねえところとかその辺に作ったんです。それで春、困んないように、いいのが出るように、周りの草を取ってやったり、少し足りないところは肥料をやったりして、作ったもんなんです。やっぱり手をかけないといいスゲができないから。

スゲを刈ってくるのが一番大変。暑い時期だから。あまりにも気温が高いときには、もし行ってね、病気になると自分でも大変だしね。人様にも迷惑かけるからね。だからね、体の調子を整えて、あまり暑くないときに、今日は大丈夫だかなって思う日を、見計らって刈って行ってくる。

■笠を編む

笠1個作るのに最初からすると、丸1日じゃちょっとできねえかな。コワ巻き（下地まき）というものを全部みんな揃えていてやるんだったら、1日で軽くできちゃうけどね。

笠1つ作るのにスゲはこれ1把ぐれえは使う。1把で1つあるかなと思うのを束にして、それで使う前に熱湯をかけて、1時間ぐらい浸すと柔らかくなる。それで縫ってるときは、スゲが乾くから、霧吹きで霧吹きながら。これが乾くとね、縫いづらいの。折れちゃうから。草だから。それでうっかりするとね、手をざあって切るからね。


コワ巻きを終えた笠

笠を１つ作るのに必要なスゲの量

コワ巻きを全部やってくの。下ごしらえだね。

そしたら、竹の長いのがあるんだけど、これヒゴというの。ヒゴでスゲを笠につけてくの。ヒゴは抑えるためにある。この糸と草を抑えるためにいるのね。抑えらんなかったらバラバラになっちゃう。つけるときは、スゲをずうっとこっちに重ねるようにしねえとね。スゲは濡れたときには太くなるでしょ、で乾くと痩せちゃうじゃん。そうすると乾いたときに間と間にものすごく隙間ができちゃうのね。その隙間が出ないようにね、なるべく重ねるようにつけるの。完成したときに隙間が出ないように。

こだわってるところは縁取りのところだね。縁取りしだいでこの笠の良し悪しができるから。隙間が出るとか出ないとか。縁取りするときに良いスゲだか悪いスゲだか見分けなくちゃいけないしね。だからこの縁取りで笠は決まっちゃう。いったんそれをしてしまうと、たとえ悪いところができても、これはごまかせないからねえ。

縁取りの工程。まるで囲まれているのはヒゴという竹でできたもの。ヒゴを使ってスゲを骨組みに取り付ける

コワ巻きをする中西さん

これを縫うときにはね、スゲをね、重ねるようにするの。重ねないと、隙間ができるから。やっぱり縫い始めから、重ねがあれば穴が開かないから。それを注意してるんだけどなかなかねえ。穴が開くのがあるんですよ。これは売りもんにならねえ。スゲの裏に針目が出ないように。これは裏に針目が出てないでしょ？　針目が出ると雨が漏っちゃうから。上の方だけをすくって。

草だからでこぼこするでしょう。だから、私はこのハサミを使ってね、上から撫でてくれるの。そうすると出来上がりがね、なめらかになるの。でこぼこにならない。ザラザラじゃなくてね、すべすべ、なめらかになるの。これ草だから、平らになるのよ。そうやって縫ってくるとね綺麗になるから。心配ない。こういうごまかしかたもあるのよ。天才じゃないんだから。

これはね私らゴトクというけれどね。それは別で買ってきて、一番最後にこれをつけるの。そうすると笠をかぶるのにいいからね。

縫う工程。縁取りの工程で骨組みに取り付けたスゲを縫い合わせている。スゲはコワ巻きに縫い付けられているわけではなく、スゲ同士を縫っている。この工程が終わると、コワ巻きの上にスゲの層ができる

ゴトクという部分

だいたい3月の初めには作り終わっちゃうね。それから今度、3月になると雪が降り終わるから。そしたら今度は編んだのを全部雪ざらしするんですよ。雪の上に置いて雪をかぶせて。それで、雪ざらしっていうのをするの。そうすると、この草のアクが全部抜けるから。そうすると虫がつかない。何でもアクがあるから虫がつくんでね。それからスゲが丈夫になる。だから、田舎の人はこの竹細工にしろ、ザルとかね、全部作ったものはね、いったんみんな雪に晒すの。そうすると丈夫になるの。長持ちするからね。

■原動力

ここら辺の人はほとんど菅笠をかぶってるね。これは田舎にはみんな根付いてますね。どこの集落に行っても。この辺の人はみんな作ってきたんだよ個人で。上手にしろ下手にしろ。でも今作る人はいませんね。私が続けるのは、これ作るの好きだから。あとは、皆さんが必要としてくださるんで作ってる。必要としてくださる方が1人でもいらっしゃれば、私も作る甲斐があるし。それでね、他所からも来てくれるんですよ。刈羽村とかね、埼玉県の人とかっていうのがね、わざわざ、またね買いに来てくれるんですよ。またそれが、「おばあさんのが一番いいから」なんて言って来てくれると、調子に乗っちゃって。じゃあもう少しまた編んでみようかってことになってね。

■これから

私の体が続く限りは笠作りをやっていたいですね。ともかくね、冬は雪が多いんですよ。新潟県はね、半年寝て暮らすっていうけど、本当に半年間は畑仕事が全然できないからね。私は貧乏症なんだかねえ、何かしないと心が落ち着かないの。ただただぼやっとしてるのがもうなんぎくて嫌で。作業はみんな私1人で。材料取るのも1人。人様をあてにしてると、人様にも迷惑かかるし。自分でできることを自分でやろうと思って。だから、

自分でできないようになれば、もう笠作りはやめようと思ってる。

［取材日：２０１９年９月14日、11月２日］

中西さんと私

【聞き書きを終えての感想】

　私は伝統の保護に興味があって、聞き書き甲子園に参加しました。私は取材に行く前、名人はきっと伝統の保護に強い思い入れがあるのだろう、と思っていました。ですが、中西さんの菅笠に対する考えはシンプルでした。楽しいから、好きだから。それは、私が思っていた伝統のかたちとは大きく違っていました。しかし、書き起こしをしていると、中西さんの菅笠に対する姿勢の方が本来あるべき伝統の姿なのではないかと思い始めました。伝統を守ることだけを意識し過ぎると、かたちを継承することだけにこだわってしまうかもしれないと気づいたからです。伝統はかたちだけではなく、その魅力もともに語り継がれるべきものなのかもしれないと思いました。中西さんは、伝統だからという理由だけじゃなく、楽しいからという理由で菅笠作りをしています。今回の取材を通じて、伝統の保護というかたちだけの結果を重要視することが、逆に伝統を廃れさせているかもしれないということを気づかされました。

profile

中西　ミツエ

なかにしみつえ

昭和９年４月10日・85歳

職業：菅笠づくり、農家

［略歴］ 23歳のときに結婚し、荻ノ島へ引っ越す。親戚から菅笠作りを習い、趣味で始める。平成10年ごろに笠を売り始める。現在は、自宅の畑で農業をしている。菅笠作りは雪が多く農業の仕事ができなくなる冬の仕事として行っている。